

日刊 勤労千葉

85. 5. 10

No. 1934

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五六（公衆）〇四七二二七二〇七

二期労働学校 がスタート

(4/27)才1回講座は杉田明講師の
「国鉄分割・民営化のねらい」



中曽根の戦争政治
うち倒すことが力ギ
感想文部会
津田文部会

国鉄「分割・民営化」15万人首切り攻撃の本格化のなかで、労働者の未来をどう切り拓いていくのか。総体として闘えない労働運動の危機をどう突破していくのか？ この課題について国鉄の現状分析を軸にして、杉田氏より講演を受けた。結論を言えば、大きな歴史の流れ、今日の「分割・民営化」15万人首切り攻撃が戦争国家づくりの一環としてかけられているを見すえなければならぬということだった。支配階級にとつて「分割・民営化」問題の真の狙いが国鉄労働運動の「分割」11解体にあり、戦争への動員にむかっているというのを再度自分達が自覚しなければならぬということである。

とりわけ、現在の「三本柱」・新マル生攻撃と決するうえで、われわれ、とくに青年がはつきりさせなければならぬことは、当局の言うことに従ったり、いつそ転職すれば何とかなる、といった打算だけで将来の展望が拓けるのかどうかをはつきりさせるべきだ。はつきり言ってバラ色の将来などあるわけがない。それは昔のような高度成長など絶対おこりえないからだ。日米経済まじりの破局的危機、膨大な財政赤字、慢性的な大量失業、徹底的な人員削減合理化、等の現実には資本主義体制の終末期の姿なのである（同時に社会主義体制の萌芽期でもあるといえる）。これを何とか延命させるために、中曽根は「政治の継続としての戦争」の道を突進しているのだ。

いま全国の勤労職場で何が起こっているのか？

NO.1

勤労「本部」佐藤委員長のおびぞ元関西 網干支部で遂に15名が脱退

二月十八日、勤労大阪地本網干（あぼし）支部において、勤労の「三本柱クリヤー」の反労働者の方針を批判し、6名の組合員が脱退届を提出し国労に加入した。

当局の先兵になり下った労働組合ならざる、労働組合（11第二労働課、先産性本部、産業報国会：）に対する労働者のまったく正しい回答である。

ところが勤労「本部」革マルは、自らの反労働者の路線の裏切りを省みないばかりかますます反動的に居直って、「『国鉄を国鉄として残す』『職場と仕事と生活を守る』とりく

みをおびこわしあしげにする行為」とわめきたてて、えげつないやがらせや脅迫、甘言の追及行動を行う一方、国労分会に公開討論なるものを申し入れ、あちこちからふき出してきている組合員の批判・不満・動揺を押さえるのに必死になったのである。そして、二月二二日から二八日まで、「対話オルグ集会」なるものを開催し、桐嶋とタガはめに全力をあげた。

ところがその結果は、更に新たに9名の組合員が革マル系執行部に脱退届をたたきつけ、一支部で脱退者は計15名（うち青年部が11名）にも

及ぶに至った。まさに、「討論を煮つめれば煮つめるほど、ますます組合不信をつのらせ、今日の勤労にいやがさす」という泥沼状況を呈しているのである。

後日の網干支部青年部の定期総会では、「今回の脱退問題は方針上の問題であった」ことを認めざるをえなくなつたことを告白している。

その通り、労働者の首切りを推進するような、労働運動「組合」なんか、誰が心底信用などするものか。勤労「本部」佐藤委員長のおびぞ元でおこっているこの「脱退問題」は、勤労の全支部に共通の根を起こる事態のほんのはじまりにすぎない。（以下、つづく）